



樹下太郎／コンサルタント殺人事件

暗い道



講談社

道 い 暗

了り止
のり
著者
解に
検印

© 樹下太郎 一九六四

昭和三十九年八月十日 第一刷発行

三四〇円

著者 樹下太郎

東京都文京区音羽町三ノ一九

発行者 野間省一

東京都文京区大塚坂下町二四

印刷所 豊国印刷株式会社

東京都文京区音羽町三ノ一九

発行所 株式会社 講談社

振替東京三九三〇

電話東京 一一二一(大代表)

(藤沢製本)

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

第一章	船村孝男	5
第二章	甲村進	46
第三章	吉川勇吉	69
第四章	毛利貴久代	93
第五章	雪森朝美	126
第六章	坂峯子	138
第七章	暗い道	162
第八章	再び吉川勇吉	175

装
幀
田
中
一
光

暗
い
道

第一章 船村孝男

1

今年も東京にも久しぶりに冬らしい寒さがやってきて、一月十日過ぎから、毎日凍りつくような気温が続いていた。

昨日の朝は氷点下四・九度で、この冬はじまって以来の記録だったという。

(今朝もそれに負けないな)

私はそれに抵抗するように、出来るだけ胸を張って駅への道を急いだ。

並木道にさしかかって、しばらく歩いてゆくと、前方に人だかりがしていた。

(昨夜のあの場所じゃないか……)

私は思わず立ちすくんでしまった。

人だかりの中には制服の警官もまじっている。

(怪しまれてはいけない)

私は気をとり直すと、再び歩きはじめた。それまでと同じ歩調でと思うのだが、どうもうまくいかない。地に足がついていないのだ。

たちまちその場所に来た。

警官は人びとを立去らせようとしていた。

黙殺して通り過ぎるのは不自然のような気がした。それに、この眼で確かめたい気持もある。

肩越しにのぞきこむと、下水溝にむしろがかぶせられていた。その下にはもちろん死体があるのだろう。私の足は突然ふるえ出した。ポケットの中の掌の内側が汗ばんでいる。無意識のうちに拳を握っていたのだ。

『なにかあったんですか』と、弥次馬なみに傍らのひとに訊こうとしたが、声が出なかった。却ってよかった。無理に出せば、変にうわずった声になってしまったにちがいないからだ。

「あまり傍に寄らないで下さい」と、若い警官がいう。

「それに、お勤めにおくれますよ」

犬を連れて老人が、警官の言葉で補足するように、
「大したことじゃありませんや。どうも、酔っぱらいが凍死しただけのことらしい。あたしよりこいつが——」
と、セバードらしい犬の頭をなでて、「先に見つけましてね」

誰へともなく言った。

人垣のうちの数人が、それで納得したというふうには、その場を離れ、駅へ向って歩きはじめた。私もそのあとに従った。

無我夢中で歩いた。内心のショックを誰にもきとられはならないのだ。

駅のホームで電車を待つひとときがきて、やっと私は出来事の重大さをあらためて考える余裕を得た。

（おれはどうやら殺人を犯してしまったらしい）

むしろの下に横たわっている死体は、おそらく私がやつつけたやつにちがいないのである。

死ぬとは思わなかった。

が、死んでしまったらしい。

凍死、と、老人は言った。凍死なら犯人は寒波ではないかという考え方があった。つとめてそう考えようとした。が、私の腕力がなかったらそいつは死なずにすんだはずだという事実を消し去るわけにはいかなかった。そうだった。

私次第でそいつは死なずにすんだはずなのだ。死なせずにすむ——殺さずにすむとは言いたくない——方法はいくらでもあったのだ。どうして私はその方法のどれかを選ばなかったのか。

悔いと罪の意識がしきりに私のこころを締めつけるのである。

私は、毎日練馬区内にある私鉄の小さな駅——Q駅から都心の勤め先に通っているサラリーマンであった。

酒を飲むのをなによりの楽しみにしていた。

酒をうまいと思って飲んでるわけではなく、酒を飲みながら過す時間に生甲斐を感じていた。仲間がいても

いいし、いなくてもよかった。

酒を飲んでいるときは——よそう、昨日の話をしよう。

昨日は一月十六日、木曜日。火曜、木曜は定時後社内の近代経営に関するゼミナールに参加することになっていて、それが終わったのが八時半頃だった。——疲れていた。一日分の仕事をすませたあとの、三時間みっちりの講義はさすがに骨身にこたえるのだ。講師は、しかも、講義が一方交通に終るのを^{おそ}慣れて、随時、受講者である私たちに質問を發するから、それは仕事よりも緊張を要する三時間であったといつてもよい。講師は財団法人「企業能率研究会」の各分野のエキスパートに依頼していて、セールス・プロモーション（販売促進）は偶然にも私の大学時代の同窓の佐藤武の担当なのだが、その佐藤さえ、講義のときには私に手ごころを加えるようなことはしなかったのである。だから、ゼミを終るとまず一杯というのが私たちの習慣になっていた。昨夜もそうしたわけで、私は二人の同僚とともに、新橋のおでん屋で

あつ焔の酒をコップであおったのである。それぞれ三杯ずつ飲んだと思う。駅の改札口で別れた。

私鉄に乗換えQ駅で降りると、私の足はひとりですべて北口駅前にある『金銀酒房』に向った。アルコールのはいつている晩は、そこで最後の仕上げをするのが私の習慣になっていたのだ。もう家へ帰ったのも同然といった気楽な気分で、存分に酔いを發散出来るからかも知れない。一週間に二回は立寄り、私はその店の定連のひとりだった。

十二時のカンバンまでねばるのも、習慣になっていた。

昨夜も、そうだったのだ。

金銀酒房を出ると凍えるような寒さであった。

屋敷町の暗がりへさしかかかったところで、大谷石の塀に向けて立小便をした。ほとぼしり去るものから湯気が立った。

寒い。

再び歩きはじめた。

道路の中央を左右にわけて、一列にプラタナスの植えられている並木道である。並木道に添って四百メートルばかりゆくと十字路があり、そこを左（西の方向）へ折れてさらに二百メートル近くまっすぐ行ったところに、私の家があるのだ。

マツチ箱のような家の中に母親と二人だけ住んでいる。四十坪の敷地とその上に建てられた十二坪程の平屋が、私たち母子の全財産といってもいいだろう。

母親、五十四歳。私は三十三歳。

父親が病死したのが昭和二十年の暮だったから、もう十八年以上も、私たちは同じ家で、同じような毎日を繰り返していることになる。

父親は大酒飲みでしかも酒乱の気味があった。さんざそれに苦しまされているので、母親は酒飲みを極端に嫌った。

しかし、私は酒飲みとなり、母親を嘆かせている。やはり血筋なのかねえ、と母親は眼をしばたたかせるのであるがそうではない。

私は、母親に従順な一人息子になりたくないばかりに、酒の味を覚えたのだ。

親孝行な息子になってくれと言わんばかりの孝男という名にも、実は私は反撥を覚えているのだ。

母親の存在を、重荷に感じはじめているといってもよい。

昨夜も暗い並木道を歩きながら、だから、私は別に帰り途を急いでいたわけではなかった。むしろ、寒さを味わっていた。

並木道の両側には邸宅が並んでいた。大邸宅は少ないが、一応『屋敷町』とよばれるにふさわしい雰囲気をもっている。

屋敷町は、Q駅の北側、略二キロ平方の正方形の区域の中におさまっていて、周囲から孤立したかたちで、いわば『お高くとまって』いた。二十数年前、私鉄会社が高級分譲地として、一口三百坪以上の単位で買主を募った一劃なのである。その地域の外側は、いまでは小住宅や工場などが急速に空地を埋めつつあるが、当時は田畑と

森と沼とそれらの風景の中に少しばかりの農家が点在しているといった、全くの田舎だったのである。沼のほとりには夏になると螢が飛び交ったものだった。小学生の頃、幾度か螢狩りしたことがあるのを私は覚えている。川もあって、その流れは澄んでいた。

環状の並木道は、屋敷町らしい雰囲気を醸し出すのに役立っていた。私鉄会社にしても、おそらくそれを狙って、縦横の公道のほかに自社の費用で並木道を設計に取り入れたにちがいがなかった。お手本は田園調布あたりではないのか。

並木道には大体五十メートル間隔で街路灯が立っていた。コンクリートの柱の上に、電球が古めかしい黄色いあかりを放っている。

電球は割れていることが多かった。

酔漢やいたずら盛りの少年たちの仕業とはかりはいえなかった。この一帯は数年前から区内でも痴漢や辻強盗などの被害の多い場所として、警察からもマークされているのである。彼等自身の目的のために電球を割るやつ

がいる以上、それに金網をかぶせても効力はなかったのだ。

だから、いつも暗かった。ひどく暗かった。

午後八時過ぎになると、白昼そこを通りつけている女たちも、ほとんどが屋敷町の外側を遠廻りするのを習慣にしていた。男でさえも、少しまとまった金銭を身につけている折などは、並木道を避けることが多かった。周辺に住むひとたちの常識になっていたといってもよい。昨夜も暗かった。

屋敷町の家々は隣り同志大分離れていたから、門灯も、家の奥から洩れるかすかなあかりも、路上を照らし出す程の明るさをもっていないのである。早目に雨戸を閉めてしまう冬の間は尚更らのことであった。

それぞれの家の庭には樹木が植えられてあった。喬木とよびたい高さのものも、空に向って伸びている。つまりは、田舎道同然の暗さと静けさがそこにはあったのだ。

冷たい暗い道であった。

星あかりが、わずかに私の行く手を照らし出していた。
た。

私のほかに路上に人影はなかった。

自分の足音を聴きながら歩いた。

十字路の百メートル程手前にさしかかったとき、私はふと歩調をゆるめた。そのあたりはとりわけ暗い場所になっていたのだが、暗さの中で人の気配を感じとったからである。

犬ではない。犬なら吠えるはずだ。

立止ると、用心深く、地上を透すすかようにして四囲を窺

った。

ことりともしない。

気のせいらしい。(つまりこれは臆病風というやつ
の仕業なんだ……)

そう思い直して再び歩きはじめたのがいけなかった。

私の足音に紛れこませるようになってもうひとつの軽い足音が瞬間耳にはいり、声をたてるひまもなく、私の首は背後から何者かに締めあげられてしまったのである。

必死にもがいた。

(殺される！)

両手で、相手の左腕を首からもぎ離そうと懸命になつた。

——駄目だった。咽喉に加えられている力は縮木しゆまのよ
うに私を責めつけ、しかも同時にそいつの右手は私の右
の手首を掴まえようとあせっている。

そいつは声を発しなかった。

無気味な程の静けさの中で、格闘がつづけられていっ
た。

相手の吐く息は酒臭く、それも焼酎らしかった。背の
高さは私と同じくらいか。

そいつは遂に私の右腕を掴むことに成功した。

金なら出す、殺さないでくれ、と叫びたかった。が、
とても声の出せる状態ではない。

たたかうほかはなかった。

こちらの姿勢が不利なだけで、相手が私より段ちがい
に強力ではないらしいことが格闘の間にわかった。最後

の力をふりしぼることにした。でなければ殺される……。相手の襲撃が無言であるのは、おそらく私を殺そうとしているからにちがいないのだ。

一瞬、二人の足がもつれあった。

うかさず、両肘で相手のからだを突きあげた。

相手の左腕が私の首からわずかに浮いた。

(こいつ！)

私は振り向きざま、そいつを突き離れた。さらに隙を与えず、体当りでぶつかって行ってやった。

男はよろけた。

畜生め！ 腰のあたりを蹴りあげてやった。

そのはずみで私は土の上に尻餅をついてしまったのだが、相手の男はもつとぶざまだった。おかしな声を出すと、見事に下水溝の中に転げ落ちていったのである。

私は無我夢中で起きあがると、ともかく並木に寄りかかった。酔いとショックと激しい格闘とで、呼吸がたまらなく苦しかった。

男が溝の中から這い出してくる気配はなかった。が、

だからといって油断は出来ない。強盗——凶器——凶器による反撃、という連想が脳裡を掠めたからである。

それにしてもあまりにも敵は静かすぎた。

呼吸がいくらか整ったところで、溝の中を覗き込むことにした。

男の落ちた場所から二メートル程離れたあたりでライターを点けてみた。

幅五十センチ、深さ一メートル近い溝の底に、男はうつ伏せに倒れていた。

溝の底には薄く汚水が凍りついていた。その溝は大雨でも降らない限り、いつも二センチぐらいの深さでしか流れていないのである。この冬の乾燥期には乾いている箇所もところどころあるくらいだった。

男は死体のように動かない。

(死んでしまったのだろうか)

まさか、と思う。

が、男がそのまま凍死してしまう可能性は充分にあった。寒気は厳しかったし、男が酒気を帯びていたことも

確かだったからである。

そのとき私の執るべきもつともよい方法は——というより当然なすべきことは、駅前へ引返して事の始終を交番の巡査に届け出ることだったろう。

しかし、私はそうしなかった。

そうすることによって発生するにちがいない繁雑なさまざまな事柄が面倒だったからでもあるし、場合によっては（たとえば、打ちどころが悪くて相手が本当に死んでしまっている場合など）一方的に加害者として追及されるかも知れないという危惧も多分にあったからである。さらにその晩の堪え難い寒気と疲労が私を億劫おつくにさせていたことも事実だ。が、なんといいても、このまま知らん顔をして家へ帰ってしまえという決意を私にさせたのは、突然いわれもなく私に襲いかかってきた男への烈しい憎しみであった。

（こんなやつは死んでしまってもいいのだ。虫けらめ！）
自分自身を安全に護ることが出来たという安心から酔いがぶり返し、その酔いの中の決断でもあったのだ。

害虫は害虫らしく死んでしまえ。

私は家への道を足早やに歩きはじめた。ときどきうしろを振り返ったのは、男が追ってきはしないかと、やはり怖かったからだ。それにしても、いつものことながら夜更けになるとこれ程人通りがなくなるものなのか。昨夜は殊にひどく、自宅に戻るまで、ついに誰ひとり行きあわなかった。

部屋には母親の手で既に床が敷かれてあった。

腕時計をはずすとき文字盤を見ると、十二時三十三分であった。

ひたすらに睡かった。

倒れるようにして布団の中にもぐりこむと、たちまちのうちに睡りに誘いこまれていった。おれは被害者なのだ、と自分自身にいきかせながら、十数分前の出来事はやがて遠くへ去っていったのである。

おれは被害者なのだ……。

そうではなかった。

今日、私は被害者ではなく加害者になっていた。

私は狼狽した。恐れた。

（このおれが殺人犯になってしまったのだろうか）

肌に戦慄が走るのだ。

いっそ自首しようか、と真剣に考える。

私に、殺される程の恨みを抱かれる原因も理由もなかった。第一そんな相手がいるはずがない。男を強盗と断定してもいいようである。

「あいつは強盗で、私は強盗をやっつけたんです。ただそれだけのことなんです」と、私は刑事に言う。「へすぐ警察へ届けなかったのは私の過失でしたが、それはひどく酔っていたからなのです。とにかくあいつはいきなり私のうしろから襲いかかってきて……」

すべてを正直に詳しく説明し、了解を求めよう。

いまとなつてはそれが最善の方法としか思えない。たとえ過剰防衛と判断されたとしても、実刑は科せられずすむはずだ。とにかく相手は強盗なのだから。

ふと気がついたとき、私は新橋駅のホームに降り立つ

ていた。事件のショックに心を奪われながらも、そこで電車を降りることだけは忘れなかったらしい。習慣のおそろしさである。

煙草に火をつけてから、

（自首しよう）

と、ひとまず覚悟をきめた。

しかし、別にあわてることがはないのだ、とも考えた。あるいは凍死として処理されるかも知れないからだ。そうなつてほしいと願つた。

ラッシュアワーの人波に乗って、田村町の方へ歩きはじめた。

田村町の交差点の近くのLビルの三階に私の勤め先があるのだ。入江薬品株式会社東京支社。

ビルの入口をはいろうとしたとき、

「いやですわ、主任さん」

うしろから声がして、社の女子社員ひとりだった。

息を弾ませている。

「え？」

「駅からずっと声をかけ通しだったんですのよ」
「へえ、そいつは済まなかった。ちょっと考え事してたもんだから……」

「お仕事のこと？」

「そうだ」

私はぶっきら棒な答え方をした。私の神経は針箱をぶちまけたような具合になっていて、とても彼女のおしゃべりになどつきあっていられなかったのだ。

2

営業部工業薬品課主任というのが私の肩書であった。

大学卒、勤続十年。入江薬品が老舗で、しかもいま尚業界のトップクラスを維持していることを考えれば、順当な地位といえるだろう。セールスマンとしては、社内でもやり手の方だと自負している。

机の前にすわっているより、外出している時間の方が多かった。

席に着いて一服すると、私はすぐ外出の支度をした。

得意先廻りを名目に、一刻も早くひとりだけになりたかったのだ。殺した、殺してしまった——とても、仕事どころではない。不安と動揺を誰にもさとられたくないという気持もある。落着け、と自分に命令するのだが、そして私としてはいつも通り落着いているつもりなのだが、頭の中にある時計がやかましく言葉を刻みつづけるのだ。殺した、殺した、殺した——と。

(早く外へ出よう)

しかし、九時半から緊急会議がひらかれることになって、私は足止めをくわされてしまった。

同業の某社が新たに売出した神経安定剤に就いての詳しいデータを入手出来たので、それを検討しようというわけである。

私としては検討するよりも、それを嘸みたかった。そしてもし時計の音が停ってくれたら、私は多分それをめちやくちやに褒めちぎったにちがいない。

会議の内容がどんなものであったか、ほとんど記憶し